

神道系ラジオ知識人・河野省三と松下幸之助の思想の比較

—人間観と宇宙観に関するいくつかの仮説の提唱

坂本慎一

序

筆者のこれまでの研究によつて、松下幸之助は戦前のラジオ放送から思想的影響を受けた可能性が指摘された⁽¹⁾。幸之助はラジオを聞くのが好きでラジオ受信機の製造・販売を始めた経緯もあり、戦前のラジオ出演者であつた高嶋米峰、友松圓諦、高神覚昇らと幸之助の思想は非常によく似ている。高嶋が唱えた「物心一如」「人としての成功」、友松が主張した「素直な心」「道は無限にある」「世間は正しい」、高神が説いた「人間道」などは、幸之助の思想にも類似のものを見いだせる。

しかしこれまで、宗教家に関する調査は仏教系知識人が中心で、神道系の知識人は未調査であつた。幸之助は神道大系編纂会会長を務めたり、伊勢神宮の内宮に茶室を寄付したりしており、神道との関係も深かつた。幸之助の思想とラジオ放送の関係を重視するならば、神道の造詣が深い出演者にも配慮すべきである。

本稿では、これを「神道系ラジオ知識人」と呼び、その代表格と

して河野省三（号は「紫雲」）を取りあげたい。河野に関するこれまでいくつか先行研究があるが、すべて短文や簡単な事績の紹介に留まつており、本格的な研究論文はなかつた。また戦時に出版された本ではラジオ知識人であることが明記されたりしているものの、戦後ににおける先行研究でそれを明言しているものはない。

以下、戦前では著名であつたが今日ではほとんど忘れられた観のある河野の事績と思想を簡単に紹介し、幸之助の思想との比較を試み、その影響の可能性を探りたい。また、その比較から最後に幸之助の人間観と宇宙観に関するいくつかの仮説を立てたい。

I 河野省三とは

一 河野の事績

河野省三は明治一五（一八八二）年八月一〇日、埼玉県北埼玉郡騎西町大字騎西五五三番地、玉敷神社の宮司であつた河野祿郎の次男として生まれた。⁽²⁾父は穂積耕雲の長男で水戸学を学び、河野家には養子として入つた。祖父の穂積は氷川神社、安房神社の宮司を歴任

し、「中庸神髓解」「勅語正解」などの著書がある。⁽⁸⁾

幼少の頃から文章を書くのが好きであった河野は高等小学校時代に『新少年』『文壇』『少国民』へ頻繁に寄稿し⁽⁹⁾、中学に上ると『中学世界』の「愛読者兼投書家」になつた。⁽¹⁰⁾受験勉強については、「私は元来、頭をいぢめるのが嫌ひで——生理的に脳全体が多少弱味があるかと思ふので——所謂試験勉強を避けた」⁽¹¹⁾と言つてゐる。明治三五（一九〇二）年に國學院大學に入學し、井上哲次郎、田中義能から影響を受けた。⁽¹²⁾

明治三九（一九〇六）年、二三歳で母校の私立埼玉中学校の教師となり、国語や日本史を教えたが⁽¹³⁾、眼病などを理由に三五歳の時に退職している。⁽¹⁴⁾大正七（一九一八）年七月に國學院大學主事兼皇典講究所主事となり、同年九月一日、國學院大學教務課長となつた。⁽¹⁵⁾

後の回想によれば、國學院で勤務し始めた頃から全国で講演をするようになり、その回数は生涯で四千回を数えたという。⁽¹⁶⁾

昭和六（一九三一）年一〇月二七日、河野は四九歳で國學院大學より文学博士の学位を授与された。大正一四（一九二五）年の末に学位論文として『国学の研究』を提出し、恩師が次々と急死したことで審査は延期になつていたが、この時は学長人事の状況に大きな変化があつたことで学位の取得が可能になつたとしている。昭和一〇（一九三五）年四月二二日、河野は五一歳で國學院大學学長に就任した。

後年、次のように回顧している。

私が国大の学長を勤めてゐる時分、学生の軍事教練を調べに来る

査閲官が時折、神職の方は外地に於いても、内地に在つても、講演に見える方が少い。そこへ行くと仏教家には活動者が多いといつて、何とか一奮発をと切望されることがあつた。さういふ時、実は私はその神職で、或は全国の宗教界中私の右に出る者はありますまいと語つて先づ答への口火を切つたことがある。⁽¹⁷⁾

河野によれば、「仏教家」に比べて、「神職」は啓蒙活動に熱心ではなかつたという。河野は啓蒙家として「私の右に出る者はありますまい」という自負で活動したのであつた。数々のラジオ出演も同様の意氣込みであつたと考へてよいであろう。

太平洋戦争が勃発した昭和一六（一九四一）年一二月八日午後三時一〇分、國學院大學講堂で「宣戰大詔奉誦式」が挙行され、河野学長は戦争の勃発を「極まりなき光榮⁽¹⁸⁾」「誠に壯快を極め感激に堪へない次第」⁽¹⁹⁾「どうか学生生徒諸子は諸先生の御指導の下に、学行一致、愈々協力一致の実を挙げ、聖戰完遂の御奉公を申上げなければならぬと確信し、又切望する次第であります」と述べた。学長の職は、昭和一七（一九四二）年一二月二二日に辞任したが、同年三月八日、「国民精神文化研究所嘱託・文博」の肩書きで、『朝日新聞』に「燐として輝く特別攻撃隊」と題する次ののような記事を書いてゐる。

壮烈、鬼神も泣く。全く文字を超越した壯舉である。尽忠報国、沈着大胆、真に感激を絶した偉大な行動である。ハワイ爆撃の報によつて皇軍の威力に驚嘆した我等日本国民は、この特別攻撃隊の崇

高な活動を明かにして、さらに大御稜威のもとに挺身する皇國臣民の偉大性に深甚の感激を覚えざるを得ないのである。⁽²³⁾

さらに「正にこれ日本民族の理想の権化」「壮烈と雄偉との感動」

「ただ感激と感涙にむせぶ」と述べ、特別攻撃隊に最大級の賛辞を送つた。

昭和二〇（一九四五）年八月一五日の玉音放送は、「生涯に最大のショック」であったといい、息子であつた渡辺国雄は次のように述べている。

母から見た父の模様は半狂乱と云ふ迄に哀切な様相で、怒号し終日声を出して泣いた。國の大事を司る政治家、軍人の失態を詰り、天皇、國民に申訳ないと声を挙げ、机を叩き、怒りに燃え、又悲しみに一杯の父の顔は今尚忘れがたいと云う。一日中食事を採らず、その翌日は日ねもす机に向つて毛筆に終始した。⁽²⁴⁾

昭和二一（一九四六）年三月には、國學院大學教授を辞任し、昭和二三（一九四八）年三月から昭和二六（一九五二）年八月まで公職追放を受けた。

昭和二七（一九五二）年六月、國學院大學名譽教授となるも、かつてほどの活動はほとんどなくなり、昭和三八（一九六三）年一月八日、狭心症で死去した。『東京朝日新聞』戦前記事データベースによれば、「河野省三」に関する記事は二四件あつたが、戦後の記事データベー

スである『聞蔵II』では、死亡記事の一件しか検出されない。河野は、戦前は著名な人物でありながら、戦後急速に忘れられた人であった。

二 ラジオ出演者として

本稿において最も重要な河野の言論活動は、松下幸之助との接点が考えられるラジオ出演である。最初の出演は、大正一四（一九二五）年六月二八日であり、「さわやかな心」という題で講演を行なった。「アナウンサーから理想的でしたといふ言葉と共に見送られた時は、マイクの妙な姿も忘れて」よい気分になつたと回顧している。当時の書には、「河野博士は……ラジオ放送また回を重ねてゐる」と書かれしており、教養放送の花形番組であった『聖典講義』が『朝の修養』と改題された時は、最初の出演者に抜擢されているので、日本放送協会からは重要な出演者と位置づけられていたようである。

また、当時のラジオ放送は、ほとんどが生放送であり、原則として録音ではなく、筆記録を残していた。しかもそれは放送局側ではなく、主に出演者側に残つており、出演者はしばしばその筆記録を自著に収録している。河野の著作の中で、ラジオ演説筆記や要約など、放送内容が分かる記述は、筆者が確認できたものだけで三九回にのぼる（次頁・表1）。放送に一回出演するだけで相当な影響があつた當時としては、これだけでも日本有数の影響力を持つた神道家だつたと言える。

一方で、日本放送協会による一回にわたる出演者人気投票で、河野

表1

河野省三ラジオ演説筆記一覧

書籍の記述からラジオ演説筆記や要約であることが明記されているもののみ(合計39回)

ラジオ放送日(放送局)	演説タイトル	掲載媒体
大正14年6月28日(東京)	「さわやかな心」	『ラヂオ講演集』第一輯、292~300頁
昭和3年7月19日(熊本)	「やまとごころ」	『放送講演集』第二輯1~10頁 梅田盛吉編『新東亜建設騎西郷土読本』巻二、160~75頁にも所収
5年5月25日(東京)	「修養講座・嗜みの生活」	『神道と国民生活』(昭和9年版)134~51頁 梅田盛吉編『新東亜建設騎西郷土読本』巻一、137~59頁にも所収
7年11月11日(東京)	「近世の偉人平田篤胤」	『日本精神の研究』165~72頁 『東京朝日新聞』昭和7年11月11日付10面にも所収
8年4月5日	「日本民族の伝統的精神」	『東京朝日新聞』昭和8年4月5日付7面
9年7月28日(東京第二放送)	「愛國僧法忍」	『日本精神の研究』85~91頁*
10年2月2日~9日(7回)	「建国史話」	『朝の修養』テキスト
11年5月7日~12日(5回)	「国意考」	『朝の修養』テキスト
11年10月30日(東京)	「教育勅語と国民生活」	『我が國民道德の精髄』27~40頁
12年10月28日	「教師の時間・惟神の道」	『神國由来と日本麓のしるべ』110~9頁
12年12月27日~31日(5回)	「古道大意」	『神國由来と日本麓のしるべ』74~109頁 『朝の修養』テキストにも所収
13年6月10日	「青年修養講話・偉人の言葉」	『神國由来と日本麓のしるべ』120~30頁
13年12月28日~31日(4回)	「清明心」	『神國由来と日本麓のしるべ』44~73頁
15年3月25日~27日(3回)	「神國由来と日本麓のしるべ」	『神國由来と日本麓のしるべ』1~43頁
15年9月7日	「新生活の標識」	『神國由来と日本麓のしるべ』131~8頁
16年3月(日不明)	「我が國の特性」	『皇道の研究』251~60頁
17年3月12日~15日(4回)	「古典と日本精神」	『古典と日本精神』1~50頁

※ラジオ演説とほぼ同じ内容であることが『國体と日本精神』80頁に記載

は上位に入らなかつた。⁽²⁸⁾ 日本放送協会に長く勤めた矢部謙次郎は、ラジオ出演の「稀れな名手」として、高嶋米峰の他に下村海南、永田青風を挙げ、河野の名は挙げておらず、毎日新聞図書編集部編『ラジオ』は戦前に人気のあつた出演者として「永田秀次郎、下村海南、太田正孝」「友松圓諦」を挙げ、河野の名はない。⁽²⁹⁾ 河野は、一般の聴取者の人気は必ずしも高くなかったようであり、聴取者が出演を要望していたというよりも、放送によつて国の文化水準を上げるという「ラジオの使命」を意識して、日本放送協会側が出演を要望していた知識人であつたと考えられる。

三 河野の思想の概要

1 国学研究以後

河野の博士論文は国学に関するものであつたが、生涯の研究テーマについて、次のように述べている。

私は主として江戸時代後半期に興隆した国学者の復古神道や神社の思想的方面などに関する研究を中心として神道の精神と其の史的発達を考察し、それと関係の深い我が國の民族性・武士道などの講究を結び付け、而してこれらの乏しい知識を基礎として、我が国民道德史乃至思想史に関する研究の道を進みつつあるものである。⁽³⁰⁾

この「国民道德史乃至思想史」において、特に重視したのは、国学の先駆としての吉田神道(ト部神道、唯一神道、元本宗源神道)であり、吉

田神社の中興の祖である吉田兼^{かね}俱^{とも}であった。吉田兼^{かね}俱^{とも}について河野は、「實に偉大な神道家」⁽³²⁾「思想界の大立物」⁽³³⁾「思想界的天才」⁽³⁴⁾と述べている。

吉田兼^{かね}俱^{とも}の思想は、「神道学説史上に在つても、或は神道思想史から見ても、極めて重要な意義を有する」⁽³⁵⁾とし、「神道の自主的立場と絶對的価値とを強調し、儒教を枝葉とし、仏教を花実とするに對して、神道を以て其の根幹と定め、所謂三教枝葉花実説を高唱し、神道こそは、天地を以て書籍とし、日月を以て證明と為すところの高大な思想であると主張した」とか、「その教理が哲理的であつて組織を有する事、教理が現世的であると共に幽世的的一面を有してをり且形式が整つてをる事、又その教理を體現し宣伝する方法、施設の備つてをること」と説明し、本居宣長の先駆として「國民精神の振作上、少からぬ貢献を為してゐる」と称揚している。

民衆への宣伝については、「吉田の唯一神道の宣伝は、全く群を抜いてゐる觀がある」とか、「宗教活動といふ面から見て、我が国の神道教派若しくは神道思想のうちで、最も多く教理の樹立宣伝に留意し努力したものは、從来の歴史上、吉田家即ちト部氏の神祇道としての唯一神道であるといはねばならない」と強調する。また、「中世や近世を通じて、否日本の神道史上、殆ど比肩するものを見ないほど、大きな神道説として其の内容と勢力を誇示し、又その活動性と影響力とを發揮した」と論じ、次のようにも述べる。

神道史上に於いて、社会的に教化宣伝を積極的に試みたものは、

蓋し吉田家の唯一神道であらう。吉田家のト部神道が応仁大乱終結の前後から、唯一神道若しくは元本宗源神道として、ト部兼^{かね}俱^{とも}の手腕によつて、急に社会的勢力を得たといふことは、前述したやうに、人物の輩出にもよるが、他の一面からいへば、其の教義の宣伝化と、その実行上に於ける方法と努力とが効果的であつたといふ所に、其の一つの原因を見出すことが出来る。……(吉田家の教えが引用者)室町時代の末から江戸時代にかけて、如何に社会の上下各方面に普及して深く歓迎され、尊重されたかは、当時の公卿の日記にも、又今日遺つてゐる種々の資料についても、十分に之を推察しうるのである。⁽³⁶⁾

河野が吉田神道を称揚する最大の理由は、教えを民衆へ普及させた実績であった。河野は民衆思想に興味があつたので吉田神道に興味を持つたのか、吉田神道に興味を持つことで大衆への啓蒙に興味を持つたのか、その前後関係は今後の調査を要するが、大まかに見ればこの二つの関心は河野の中で並行していたようである。河野は、室町・江戸期における吉田神道の書を、昭和初期において紹介する本も執筆している。⁽³⁷⁾

2 啓蒙家としての通俗本収集と講演活動

啓蒙家としての河野は、数々の神道系の啓蒙書を収集した人でもあつた。後年これらの蔵書は河野家から國學院大學に寄付され、「河野省三記念文庫」として所蔵されている。⁽³⁸⁾河野は、江戸時代の神道啓蒙

家であつた増穂^(ますほ)残口^(ざんこう)に強い関心を示し、「私はさういふ方面を調べて、そんな書物も相当持つてゐるが、非常に重要だと思つてゐます」⁽⁴⁵⁾と述べている。

余りにも本好きなので、河野の妻は「そんなに書物が好きなら本の着物を着て本の御飯で、本のお汁で、本のお数に本の御馳走を食べたらいでしよう」と責めたてた⁽⁴⁶⁾という。また河野の書籍収集について、「決して高価な稀観本には手を出さない。……庶民的な一般的なごくありふれた書物を集めて、これ等からこの時代の思想学問の実際を探らうとした」⁽⁴⁷⁾とか、「縁日の夜店で得た本も少くない」⁽⁴⁸⁾という指摘もある。

河野は、平日には國學院大學に近い東京の仮寓で起居し、土曜日に玉敷神社へ帰り、月曜に東京へ出勤する生活を繰り返していた。本の読み方について、三つの書斎があつたとしており、玉敷神社、渋谷や池袋の仮寓、電車の中の三箇所で本を読んでいた。電車の中の読書について、「ただ目を通して、処理すればよいものを片づける」「多くの原稿や講演などの要領も、此の組立ての書斎で構案することが少くない」と述べている。息子であつた河野道雄によれば、河野は玉敷神社での食事の時でさえ本を手放さなかつたといふ。⁽⁴⁹⁾

こうした寸暇を惜しんだ本の収集と読書は、啓蒙活動に活かされていた。一般向けの講演活動については、次のように言つている。

私は一般に講演については、「何ものかを与へよ」と云ふ考へで、話のうまさや出来不出来はともかく、是非相手に何か役に立つやう

な、有益な話の種子が一つでも二つでもお土産になるやうに、実のある話を用意したいものだと念願してをります。折角、貴重な時間をさいて来たり、いろいろ都合をつけて来られる方も少くないでせうし、又場合によつては、少からぬ経費や努力を傾けて催されることがあるのですから、それらの費えを一つに貴重な「時」と見立て、「時間と引き換へ」といふ心もちで、聴講者の厚意や発企者の努力に報いたいものだと思ってゐます。⁽⁵⁰⁾

一方で、弟子であつた高沢信一郎は、「先生の授業や講演は、あれ程に流暢にして烈々たる名調子であるのに反して、直々に膝を間近くしてお話を承る時はまことに静かな落ついた雰囲気で、まるで別人の趣きがあつた。うつかりすると独語されて聞きとれぬ位であった」と述べている。河野自身も、「私は昔は声が出ないで困りました」「元來声は甚だ低い、而も話は下手なのであります」「小さい時分、耳がよく聞えないで困りました。人の口の動き方で其の人の言つて居ることを知つた位で、微兵検査はそれで刎ねられたのです」と言つている。これらを考慮すると、ラジオ知識人としての河野の雄弁は、天性のものだつたようである。

II 松下幸之助の思想との比較

河野の思想と松下幸之助の理念には、いくつかの共通性が見られる。以下、両者が共通して使うフレーズを挙げて思想を対照し、その類似

性を確認したい。

一 宇宙の「根源」

松下幸之助は、終戦後、繁栄、平和、幸福を追求するP.H.P運動を起した。この運動を起すに当たって、次のように考えたと述べている。

今から三十数年前、P.H.P研究所を始めましたときに、P.H.P研究の骨子はどういうようにあるかということを段々と考えてまいりました。

その結果この宇宙万物はまことに整然と、寸分の間違えもなく無限の過去から未来を将来へ渡つて宇宙の存在が動いてゆくわけでございます。そういうなことを考えてまいりました結果、宇宙を整然と運行してまする諸現象は、どこにあるのんかということを考えまして、これは宇宙根源の力の働きであると。宇宙根源の力というものが存在しておつて、その根源の力によつていっさいが動いておるのであると。しかもその動きはいわゆる生成発展の姿をとつて一分の狂いもなく動いていると。^(註)

だいたい森羅万象すべてのものは、ただ一つである宇宙根源の力によつてつくり出され、またこの力によつて、その運行を続け、その生命の発展を遂げつつあると思うのであります。その中でも特に人間は、宇宙根源の力（あるいはこれを神と言い換えてよいと思いまが）の代弁者として、その神の意志の認識者であり、実行者としての本質を与えられていると思うのであります。^(註)

幸之助の説く「宇宙根源の力」は「ただ一つ」の存在であつて、「神」と言い換えてもよい存在である。また、次のようにも述べている。

一般に宗教においては、神から知恵を授かるとか、仏の大知に触れるとか申しているようですが、この神や仏というのは、結局、P.H.Pで言う宇宙根源の力を人格化して、導き易く、分かり易く教えておられるのであります。^(註)

幸之助は「P.H.P研究の骨子」を探し求めているうちに「宇宙根源の力」という発想にたどり着いたとしている。

この「宇宙根源の力」は、三つの特徴があると言える。第一に唯一神的な存在であること、第二に擬人化されていないこと、第三に「仏」と同等とされていることである。

これが唯一神的であることについては、次のように説明している。

「宇宙根源の力」は「神や仏」と同様のものである。また、「神や仏」が「人格化」されているということは、「宇宙根源の力」は人格化されていないと考えられよう。実際に幸之助の言説の中で、「宇宙根源の力」が何か言葉を発しているとか、感情を訴えているということはない。また、幸之助自身がシャーマンのように「宇宙根源の力」と意思の疏通を図つたり、その言葉を代弁したりすることはなかつた。

これとよく似た神の概念は、吉田神道に存在する。吉田神道の斎場所大元宮は、国常立尊（天御中主神）を最高神として祭つてゐる。国常立尊は、記紀の天地創造神話において最初に出現する神であり、天照大神などとは異なつて人間のような描写はされておらず、存在が明記されているだけである。

この神は、しばしば「宇宙の根源」と説明される。出村勝明は「兼俱は、本来の神とは、天神地祇八百万の神々等の所謂常の神を言ふのではなく、天地に先だつところの宇宙の根源を意味するのであり、道といふのも、普通の五常五倫の道、或は古典に示された我国の道等を意味するのではなく、それらを超越した、宇宙の原理、根源に源を發する普遍的な道を言ふのであるといふ事を強調してゐるのである」⁽⁵⁾と述べている。一般向けの啓蒙書にも、「吉田兼俱は宇宙の根源である大元尊神（国常立尊＝天御中主神）を祀るために、吉田神社の南東に斎場所をもうけ、中央に大元宮を建てた」と書かれている。

河野はしばしば吉田神道に則つて神の説明をしており、たとえば次のように述べている。

高天原には宇宙の中心根源としての神格を有し給ふ天御中主神が成りまし、次に一切の生産育成の根本たる力としての高皇產靈神⁽⁶⁾と神皇產靈神⁽⁷⁾が成りまし、又安定と永遠との力を示す天常立神⁽⁸⁾が成りましたのである。

河野は、国常立尊（天御中主神）を「宇宙の中心根源」と述べ、最

高で唯一の存在としている。これは擬人化されていないという意味でも幸之助の「根源」と同じである。

しかし吉田神道ではあくまで「神」が主とされ、そのうえで「諸佛の心も神也、鬼神の心も是神也」と解釈され、「神主仏徒」「神主儒徒」の序列は保持されている。一方で、河野は吉田神道とは異なり、神と仏は呼び名の違いにすぎないことを強調する場合もあつた。たとえば「こんな偉大なる力を以て働いて居りながら我等に命令を下すことは吾々に實に自由なる動を与へて居る。意思の自由を与へて居る。而も宇宙は己は神だとか仏だとかは言はぬ。見る人の心々に任せて居る。之を神と呼ぼうが、之を仏と唱へようが、或は之を大我と言はうが、天何をか言ふやである」と述べたり、「統一思想と云ふのは倫理では統一原理であり、統一原理のことを宗教家は神と言ひ、科学者は因果律とか自然法とか名付ける」と論じたり、「實に宇宙は、これを釈迦が真如と名づけようが、阿弥陀仏と名づけようが、キリストがゴッドと云はうが、天なる父よと呼ぼうが、天理教が天理主と名づけようが、科学者が自然律と名づけようが、宇宙は、天は平氣の平左衛門であります。実に、公平無私、何らのスローガンも掲げて居りません」と主張している。この点は幸之助の「根源」と全く同じ発想であったと言つてよいであろう。

また、河野は「宇宙の中心根源」だけではなく、天照大神や太陽への信仰の重要さも説き、吉田神道のように「根源」が天照大神より優位であると強調せず、「根源」と天照大神のどちらが大切であるか明

言を避けているように見受けられる。河野は、「最も貴い天つ神の中

でも、又最高至貴の御稟威と御地位とを有したまふ天照大神⁽⁴⁾」とか、日本人の信仰の「中心は天照大御神⁽⁵⁾」と述べる。幸之助も「天照大神は最高位の神⁽⁶⁾」と述べたり、天照大神の心が「日本人の眞の精神⁽⁷⁾」とか、「日本精神の淵源⁽⁸⁾」と説き、「根源⁽⁹⁾」の説明とは別の文脈で、天照大神の重要な性を指摘することもあつた。

あえて両者の違いを挙げれば、河野は先の引用の通り、「高天原には宇宙の中心根源としての神格を有し給ふ天御中主神が成りまし、次に一切の生産育成の根本たる力としての高皇產靈神と神皇產靈神が成りまし」と述べ、「力」は高皇產靈神と神皇產靈神なのであつて、「宇宙の中心根源」自体は「力」ではないとしている。一方、幸之助は「神……すなわち、宇宙の創造力、宇宙の根源力⁽¹⁰⁾」と述べ、「宇宙の根源」に「力」が本質的に具わつていると考えていた。

二 「人間は万物の王者」

松下幸之助には「人間は万物の王者」という主張がある。最初期P H P運動の成果である『P H Pのことば』に既にこの主張があり、主著とも言える『人間を考える』では、「新しい人間観の提唱」を巻頭に掲げ、「人間は万物の王者となり、その支配者となる」と述べている。

「人間は万物の王者」という考えには、二つの特徴があると言える。第一に「万物」には非生物も含まれており、第二に自然に則った社会制度で人間は豊かになるという発想がしばしば連関して説かれている

ことである。

幸之助は「宇宙根源の力は、人間をわが代弁者としてもつとも愛護し、その繁栄、平和、幸福を実現するために、この全宇宙を秩序づけられている⁽¹¹⁾」と説き、「人間の特性は、自然の理法に従つて、宇宙根源の力から与えられたものである。それは絶対至上の命令である。これこそは、人間に与えられた天命と名付けてもよいであろう。」この天命が与えられているために、人間は世の支配者となり万物の王者となる⁽¹²⁾」と言つていて。この表現からも明白であるが、「万物」は生物に限定されたものではなく、宇宙の中に存在するすべてが含まれている。別なところでは「一応万物いうたら自然で全部入つとる」と明言している。

また、幸之助は「宇宙根源の力は、宇宙の秩序（法則）を通じて、われわれ人間に限りない繁栄を与えてるのであって、私たち人間は、この宇宙の秩序に素直に順応すれば繁栄を得る」とも言つており、「宇宙の秩序」に「順応」することが人間として「よろしき道」であると述べている。⁽¹³⁾

「人間は万物の王者」とよく似た主張は、吉田神道や、吉田神道に大きな影響を与えた伊勢神道（度会神道）にも存在する。伊勢神道の「神道五部書」に含まれる『伊勢二所皇太神御鎮座伝記』や『造伊勢二所太神宮宝基本記』には、「人は乃ち天下の神物なり」という主張があり、吉田神道が一般向けの啓蒙書として流布させた『神道大意』には、「人民は陰陽五行を具足する故に万物の中にて貴者と致す」と書かれている。

河野もまた、明治初期、神宮教院が配布した『神道摘要』の一節である「天地万物、悉皆神さまの御恩に漏るるものはなく、御恩の中に生成するうちに、人は殊更深く御恩⁽²⁸⁾を蒙るなり」という文章を紹介し

たり、「宇宙の根本的な本質が即ち『ヒ』であります」と説き、「その『ヒ』のそれが具現化した『ひと』（人）も尊い」とか「『ひと』（人）と云ふ言葉それ自体に万物の靈長⁽²⁹⁾と云ふ意味がある」と説明する。

同様の主張は真言神道（兩部神道）に「人は則ち天下の神物なり」⁽³⁰⁾とあり、天台神道（山王神道、日吉神道）にも「人は乃ち天下の神物」⁽³¹⁾とある。一方で賀茂真淵は、『国意考』で「世の中の生るものを、人のみ貴しとおもふはおろか成こと也」⁽³²⁾と述べてるので、「人間は万物の王者」と同様の思想は、必ずしも神道全般に見られるものではない。しかし吉田神道を高く評価する河野は、人間が「万物の中に貴者」と考えていたようである。

自然に則る社会制度が望ましいという発想は、『日本書紀』に「治⁽³³⁾天地に称ひて、万民事なし」という言葉があるので、神道全般に見られる発想と考えてよいであろう。河野もまた「私共は宇宙發展の原則と一つです」と述べ、「宇宙の力を私共の祖先は単に宇宙の力と考へたのではない。國家の發展、国民生活の發展に対する原動力として神と仰いだのである」⁽³⁴⁾としている。

もつとも、河野の場合は、宇宙の原理に則るのは、日本の特長とされており、「日本民族性なるものは、要するに宇宙發展の原理、万物進化の原則と同じ軌道の上にあると云へるのである」と述べる。

三 その他のフレーズ

1 「知情意」と教育

幸之助は人間の精神の働きについて述べる場合、「知情意」の三つを重視した。たとえば次のように述べている。

人間には知情意の働きがあります。これは天与の本質から出る人間性であります。しかし、知情意は働きでありますから、時と処とにしたがつて異なり、人おのののによつてもまた千差万別であります。しかも本質のように変化しないものではありません。われわれの境遇、努力により大いに変化し、知は高くなったり、低くなったり、情も厚くなったり、薄くなったり、意も強くなったり、弱くなったりします。

この知情意は、人間が人間としての働きを高めてゆく上において非常に大事な枢軸であります。すなわち、知情意の調和をはかり、かつ高めてゆくことが、人間性を向上させることになると思うのであります。⁽³⁵⁾

別なところでは、「知情意の調和」ということが非常に大事やないかと、教育において⁽³⁶⁾と言つており、「知情意」と教育を関連づけて述べている。

河野は「皇位の表象たる三種神器即ち宝鏡、神璽、靈劍は古來政治理想としての正直、慈悲、果断、若しくは智仁勇、或は知情意を意味

するものとして解釈されて来た」と論じておる、「知情意」は二種の神器と関係があるとしている。他にも「智情意に亘つての宗教教育」が大切であるとか、「明治時代の教育者は知情意の心理作用を調和的に重んずべき」と説いたと主張する。また、国学は「知情意各方面の心理的、時代的要求を満足せしめる性質を有する学風」であり、「国学は知情意三方面の要求に対して、時代の人々に新しい満足を与えた」としている。

2 P.H.Pと「無窮、平和、幸福」

幸之助は、人間が追求すべきものは繁栄を通じた平和と幸福だと考え、これを「Peace and Happiness through Prosperity」と英訳して「P.H.P」という略語を作った。「繁栄、平和、幸福」という言葉は、幸之助の言説の中に多く、たとえば次のように言つてゐる。

すべてのものは、人類の繁栄、平和、幸福を助成するために存在するのであって、動物に至っても植物に至っても、自然界の一切のものは、あげてこの人類の繁栄、平和、幸福に奉仕するところにその天与の使命があり、そのために殺す必要のあるものはこれを殺し、生かす必要のあるものは、これを生かすことが正しい道であつて、この殺すべきものを殺さず、生かすべきものを生かさない」とが、眞の殺生である。

他にも「宇宙根源の力は、人間に限りない繁栄、平和、幸福を与え

ている」と述べるなど、「繁栄、平和、幸福」の三つは、順序を崩すことなく、一種の定型句のようになり、幸之助の言説の中に登場している。

これに対して、河野は「寶祚の無窮、國家の平和、國民の幸福」という表現を多用する。これも河野にとつて定型句であるかのように、これら三つが順序を崩すことなく羅列されている。河野は、「元来、寶祚の無窮（あまつひつぎのきはみなきこと）」國家の平和（あめのしたのおだひなること）国民の康福（おほみたからやわらかなること）を祈るのが我が敬神の根本義である」とか、「寶祚の無窮、國家の平和は自ら国民の康福となるのである」「寶祚の無窮、國家の平和、國民の康福を図る所に、神道の大精神が在るのであって、それ即ち我が敬神の根本義なのである」、新嘗祭とは「寶祚の無窮と国家の平和と国民の幸福とを祈るのであって、陛下の御壽は勿論、國民の生命も亦、日に新に日に遠く延びるのである」となどと説明している。「寶祚の無窮」は「天壤無窮」と同義であり、「天下の民の窮することなし」という意味では、「繁栄」と重なる部分が大きい。つまり、両者はほぼ同じ表現を多用していくことになるが、筆者によるこれまでの調査では、「繁栄、平和、幸福」の三つをこの順序で述べている思想家は、幸之助と河野以外に発見できていない。

3 「魂」と仕事

松下幸之助は、勤勉に働く重要さを指摘する際、しばしば「魂」に言及している。たとえば、次のように言つてゐる。

ひとりの職人、あるひとりの芸術家と申しますが、こんな人はわずか四畳半の間に入つて、終日こつこつと物を刻んでいる。そこに非常に喜びを感じ、自分の魂を打ち込む。そういう一つの行き方を求める」とも私はあり得ると思うのです。

また、「社員稼業」では、「何に精魂を打ち込むのか」と述べ⁽¹³⁾、「月日とともに」では、「魂をこめた力強い活動」、「商売心得帖」では、「魂を入れた値段」と言い、自社の製品についても、「私どもが魂をこめた製品」と言つてはいる。

河野もまた、仕事に関して論じる際に「魂」について述べている。「物になにか魂を与へる。之は日本人の特徴であります」とか、「其の魂を全身に打込ませる」と言い、「生活そのものに依つて魂を磨き上げる」ことの重要性を説く。河野において「魂を打ち込む」という表現はことのほか多く、これも一種の定型句のように使用している。

4 「共存共榮」

昭和初期の流行語でもあり、松下幸之助がしばしば述べた言葉に「共存共榮」がある。幸之助は昭和八（一九三三）年六月二四日に「本所は、徹底せる合理経営により廉価なる優秀品を市場に送つて社会に貢献し、うち正当なる利潤により事業の基礎をますます強固ならしめんとする」と述べ、「これを諸君とともに誇りとし、外に向かつて強調するはもちろん、取引店に対しても十分この点を認識せしめ、もつて共存共榮の実をあげたい」と說いた。同年一一月一五日に代理

店に対する配当金つき感謝積立金制度について語つた時も、取引店との「共存共榮の理想実現」を目指したいと言つた。

河野も同様に、「共存共榮の浦安の國の完成」を目指すべきだとし、「我が國体は國民の共存共榮を活動の原則とし、社會の平和幸福を活動の標的としてゐる」とか、「吾々日本人の勤労尊重の精神、吾々日本人の働くことを貴ぶ心持は即ち共存共榮で、言葉を換へて申せばお蔭様、之は實に大事なことである」と論じてはいる。

「共存共榮」は満州国建設の際にスローガンとされたこともあるって、當時広く使われた言葉であったが、両者はこの語を満州国に限定せずに、商売など様々なことに当てはめて使用している。

5 「負けじ魂」

昭和八（一九三三）年八月二八日、松下幸之助は「負けじ魂」と題する講話を行なつたことがあつた。幸之助は「國家を守り平和と向上を願わば、国防の完備とこれを運用する負けじ魂がぜひ必要なことはいうまでもない」と述べた。また戦後ににおいても、「われわれはやはり七へんの失敗をですね、八へんめに成功さすというようなまあ負けじ魂とでも申しますかね、復興精神といいますかね、そういうものをやはりもつと盛り上げなければなりませんね」と說いてはいる。

河野もしばしば「負けじ魂」を強調しており、「日本精神」の基礎は「まじめ」「おかげさまで」「負けじ魂」の三つであると主張している。別なところでは、「負けじ魂」「眞面目」「御蔭様」という「気持」は「日本固有の道」であるとしている。

6 「日本の使命」

国際情勢について論じる際、松下幸之助はしばしば「日本の使命」について言及した。幸之助は、「日本の使命は、お互い日本人が好むと好まざるとにかかわらず、非常に重大なものである。その重大な使命を担つていかなければいかんという感じがするわけであります」と述べ、より具体的には、「二十一世紀においては日本とアジアが繁栄する、そういう感じがする。それが大きな世界の循環であるとするなら、当然、それを受け立つというか、受皿を用意するのが日本の使命である」と論じている。

河野は、国家には「経済的使命と文化的使命と倫理的使命」とがある⁽²⁾と論じ、戦前において日本が果すべき世界的な三大使命として、「世界新秩序の建設」「世界文化の建直し」「人類の世界観、人世観を改革」することと主張した⁽²⁾。戦後は、「西洋文明を攝取して来た我が日本の国家は、たどひ太平洋戦争に惨敗しても、将来に於ける重要な国際的位置と世界人類に対する文化的使命とについての信念と努力とを軽視してはならない」と力説し、戦前を回顧して、「ナチスが隆盛を誇る頃、心ある日本人は、世界の将来はソ連の共産主義と米国の資本主義が国際的な南北の陣営に分れて、アジア大陸に於いて対峙した暁、日本がその第三勢力として、此の両思潮の衝突を緩和し、進んでその調和展開に乗出す運命と使命とを担つてをることを自覚したのであつた」と説明している。国際情勢の分析自体は必ずしも一致していないが、その中で日本の果すべき役割を積極的に見いだそうとしている点

は共通している。

以上、松下幸之助と河野の思想は、それぞれ同じフレーズを主張し、類似の思想を展開する場合があることが分かった。宇宙の「根源」、人間を「王者」や「貴者」とする発想は、两者とも伝統的な神道の宇宙観や人間観、特に国学成立以前の神道と大筋において一致する発想である。言い換えれば、これらの点において両者の思想は、ほぼ神道の伝統に則っているものと解釈できる。

III 松下幸之助との相違と河野の問題点

松下幸之助と河野の思想には、当然のことながらいくつか相違点が存在する。ここでは細かな相違点ではなく、より本質的な差異を指摘したい。

一 河野の独断ではないかと思える主張

河野は神職にあって、その思想の根本は神道であるが、記紀の教えに出典があるとは思えない主張をすることもあった。それは、河野が頻繁に述べつつも、内容が普遍的ではなく、ほとんど独断ではないかと想像されるものである。

たとえば、河野は「大和魂」をいくつかの要素に分解する。大和魂とは、永遠を意味する「神々しさ」、統一を意味する「懷かしさ」、純真を意味する「すがすがしさ」に分解できるとし、「神々しさ」と

「すがすがしさ」を足すと「雄々しさ」になり、「懐かしさ」と「神々しさ」を足すと「みやび」になり、「すがすがしさ」と「懐かしさ」を足すと「おおらか」になると説いている。この主張は、河野の言説の中でも登場回数が非常に多いが、出典は全く明記されていない。⁽¹⁷⁾

書籍で頻繁に論じているならば、ラジオ放送でも何度も言及したと想像される。しかし、幸之助には同じ言説はもちろん、類似の主張も見られない。

他にも河野は宗教的情操を養うために、宇宙はいかに大きいか、宇宙の運動はいかに規則正しいか、大自然がいかに美しいか、その道の達人の話を聞く、実社会に直面するという五つの教育が大切であると論じている。⁽¹⁸⁾ これも何度も言及しているが、出典や発想の基となつた思想を明記していない。また、桃太郎の歌や「もしもしし亀よ」を長くゆつくり歌うと「大和心」の一要素である懷かしさがなくなると主張するなど、偏見としか思えない主張もある。

自らの発想法について、河野は「ちょっととした瞬間に大変盲い考や文句を考へつくことがある。さう云ふときは早速古名刺の小さな原稿用紙に記して置く」とか、「成るべく頭は空っぽにして置かなければならない」と述べている。⁽¹⁹⁾ 自動車に乗った時に思いついたことをメモしたりしており、「頭を記憶箱として虐待してはいけません」と言つてゐる。河野はこうした一種のひらめきを重視し、執筆や講話において役立てていたようである。この種の言説は創造的である半面、独断や思い込みに陥る危険性もある。河野による独断や偏見と思える発想は、幸之助に同様のものが見いだせないだけではなく、当時の聴取者

にどれほど支持されたのかも疑問であり、ラジオ出演者として、河野に今ひとつ人気がなかつた一因だつた可能性もある。

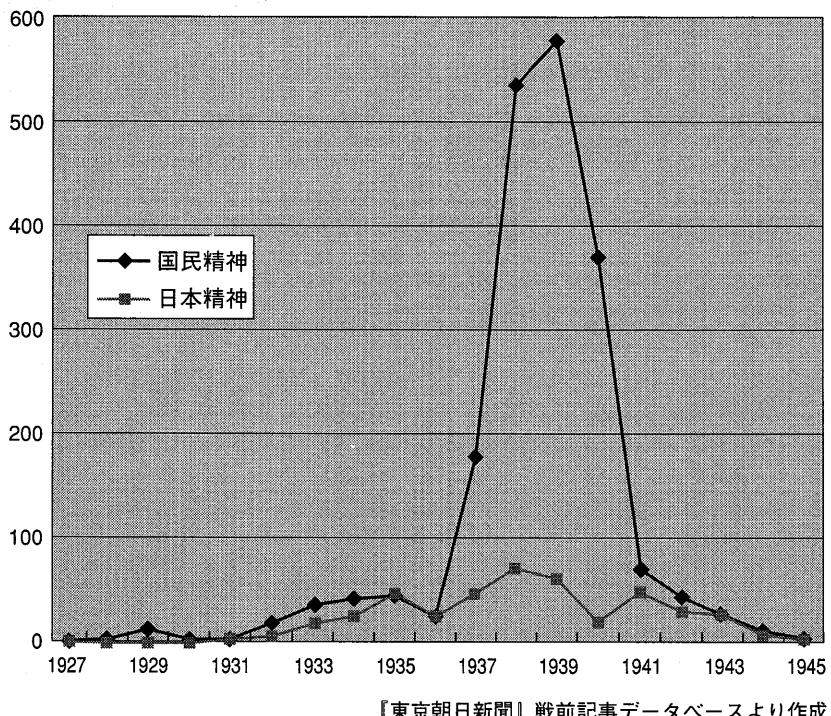
二 太平洋戦争への荷担

先の引用にもあつた通り、河野は「大東亜戦争」に肯定的であり、積極的に推進しようとしていた。その思想には、まず事実として間違つた主張が多分に含まれていたと言える。

河野は、「大東亜戦争」における「日本精神」の重要性を指摘するが、「日本精神」が興隆したいきさつについて、次のように説明する。私共は初めて満州事変から国際連盟脱退にかけまして、世界に於ける日本といふ立場をハッキリ認めたのであります。明治維新に世界の仲間入りをした日本を見出したのですが、今又我々は世界の仲間外れをした日本の姿を見出したのであります。即ち孤立日本を見出したのであります。其處で初めて我々は外国から離れた純粹な日本民族の魂を自覚するに至つたのであります。乃ち世界に於ける日本といふ立場から、我等の魂を日本精神といふことになつたのであります。国民全体が知らず識らずの間に日本精神といふ名に於いて我等の魂を自覺するに至つたのであります。私は日本精神といふ名は斯くの如くにして起つたものと思ふのであります。⁽²⁰⁾

別なところでは、「大正の半ばに」「国民精神の自覚」が起き、「大正の末期に」「建国の精神が復活」し、「満州事変前後から国際連盟脱

グラフ1：『東京朝日新聞』における「日本精神」と「国民精神」の登場回数



『東京朝日新聞』戦前記事データベースより作成

退のころにかけて」「ハッキリと日本精神といふ名に於ける我が民族精神の大きな自覚が起つた」と説き、「国民精神」の興隆の後に、「ハッキリと日本精神といふ名」が興隆したと述べている。また、「満州事変を契機として、此の言葉（「日本精神」のこと—引用者）が頻りに使用せられる事になつた」とも主張している。

しかしこれらの主張は、事実とは異なる。グラフ1は、『東京朝日新聞』における「日本精神」と「国民精神」の登場回数を示したものである。確かに国際連盟脱退の昭和八（一九三三）年頃から「日本精神」の使用が確認できるが、それ以上に顕著なのが、日中戦争開始以降の「国民精神」の急増と、太平洋戦争の開始に伴う急激な減少である。斯様な変化は、第一次近衛内閣によつて主導された「国民精神総動員運動」と関連していることは間違いない。

このグラフは、あくまで『東京朝日新聞』紙上における単語の使用回数であつて、河野はラジオ放送など他のメディアを念頭においていた可能性もありうる。しかし、「日本精神」が『東京朝日新聞』紙上で最も多く書かれていた時でさえ、それを遙かに上回る回数で「国民精神」が説かれていた事実は看過しがたく、日中戦争下における「国民精神総動員運動」を考慮すれば、ラジオなど他のメディアでも「国民精神」の方が多く言及されていたと考えて間違いないであろう。少なくとも河野は「国民精神総動員運動」を見落としており、客観的な論証も行なつていない。「国民精神」が興隆した後に「日本精神」が興隆したとする指摘は、どうやら個人的な実感で述べただけのようである。

同様に日本人の長所として、「発明的才能が豊富」と述べ、日本人が飛行機や戦車を発明したと説いている。⁽¹³⁾日本人は「今では世界一の頭を有する民族になつたと云つても間違ではない」と何の論証もないまま断言し、当時同盟国であつたドイツとイタリアは日本に近い國柄であると主張していた。⁽¹⁴⁾

河野は、後にA級戦犯として起訴される松岡洋右や荒木貞夫を何度も称揚しているが、その根拠もナショナリズムを昂揚したという一点のみであった。河野による「大東亜戦争」肯定論の根底には、しばしばこうした稚拙な議論が見られるのである。

既に紹介したように、河野は玉音放送を聞いて「生涯に最大のショック」を受けた。河野は、太平洋戦争において、時代に妥協しなければならなかつたり、軍国主義から影響を受けたりした側ではなく、明らかに社会へ影響を及ぼし、大衆を感化した側にいた知識人であった。戦後、河野は次のように述べている。

終戦後、私も人並に此の敗戦の原因についていろいろ考へてみた。

……此の大戦の惨敗が、単に軍閥の陰謀や横暴や軽拳や、或は外交政策の不手際や、一部の若い力の短慮性急などに帰する戦後のやかましかつた声の外に、大体に於いて、国民一般の政治的、国際的方面に対する認識の不足、道徳的、社会的方面に於ける訓練の未熟といふ側に、却つて多くの欠陥があると思はれる。⁽¹⁵⁾

この分析を好意的に解釈するならば、啓蒙家として「国民一般」を

充分に啓蒙できなかつたことに、自責の念があつたと言つこともできる。しかし批判的に見れば、「国民一般」における「多くの欠陥」を見抜けなかつたことや、「日本精神」の興隆など、いくつもの間違つた現状認識をしたことに対し、反省の念が薄いとも受け取れる。

筆者による調査では、戦後に河野が太平洋戦争について反省や再解放のような内容を述べている言説は、これ以外に発見できなかつた。戦後は自叙伝や身辺雑記を書いているにもかかわらず、三男の健雄を戦争で失つたことを記している以外は、太平洋戦争を肯定も否定もせず、一切語りたがらなかつたように見受けられる。

こうした点は、松下幸之助とは著しく異なつてゐる。太平洋戦争開始時、まだ四〇代であつた幸之助には日本の財界全体を牽引する程の権力はなく、幸之助は明らかに戦争を牽引した側ではなく、時勢に協力を強いられた側の人間であつた。それにもかかわらず、松下飛行機株式会社を創業して軍事協力したことについて、戦後「私はやつぱり若かつた」と言い、次のように述べている。

そのときは、今は国のために命でさえ捧げねばならないときだから、軍の命令とあらば当然飛行機の仕事もしなければならないといふ氣持が半分はしめていたけれども、あと半分は、おれがやらなければダメだという、世間に對して多少てらう気分があつたことも、ほんとうである。それは大きな戦争のためにやつた仕事だから、個人的に失敗したとは思わないけれども、それをやつたがために、あの苦しみがひどかつたから、人生の失敗というのは、ああいうと

こうにあるのだということを深く味わったわけだ。¹⁴³

幸之助は戦争への荷担を「人生の失敗」と位置づけた。軍の要請により戦争協力したと述べるもの、責任を軍部に転嫁する様子はなく、自身の戦争協力に関して、戦後は一貫して否定的に述べている。少なくとも戦後における自身の立場は明確にしており、この点だけでも河野とは対蹠的である。

三 河野が抱えた問題

河野の言説のうち、妥当と思える部分は学問的根拠もはつきりとしており、充分に練つた思想であると感じられ、松下幸之助も採り入れた可能性がある。しかし、根拠が不明で極端な主張は、話す内容に事欠いて、むりやりひねり出したようなものも多かつたと見受けられる。戦前の河野は、哲学的、宗教的修養について言及しつつ、「神職の間に此の方面的修養書を読んで居る方が専いやうであります」¹⁴⁴と指摘し、「神道家や国学者の間に、筆や口を以て論陣に進出する者が少かつた」¹⁴⁵と述べている。

神道研究者には、柳田国男のように民俗学者もいたが、河野の如く「神道の『本道』」の立場にあって、河野のライバルになるような神道系ラジオ知識人は、筆者が調査した範囲では見当らなかつた。先にも論じたように、河野は日本放送協会が出演させたいと考えていた知識人であり、時には話す内容がなくとも、代わりがないという理由で出演していたこともあつたと想像される。その場合、やむなく中身の

薄い話や思いつきの内容などで放送を埋めていたこともあつたであろう。こうした事態は、河野と同様の思想的立場にある別の知識人がいれば防げたはずである。

また、河野に対して建設的批判をしたり、部分的な誤りを指摘できる神道家がもっと多く存在していれば、河野が思いつきで危うい持論を展開する機会はずつと少なくなつていだと考えられる。この観点から言えば、河野に極端な言説が見られるのは、他の神職が余り社会に出て活躍しようとしたことに大きな原因があつたのではない

か。河野の極端な言説は、神道系ラジオ知識人として孤軍奮闘しなければならなかつた苦悩の証と言つともできる。

また、もう一つの問題は、当時においてラジオの力が正しく認識されなかつたことである。河野はラジオの力を啓蒙における有効性といふ点では理解していたが、権力という点では理解していなかつた。河野は、哲学的、宗教的修養について述べ、「斯ういふ書物が国民の修養に如何に必要であるかを余程能く物語つて居るものはラジオの朝の修養でありますか、或る仏教家が朝の修養講座に於いて、法句經をやつた時に、大喝采を博したことがあります」と言つたり、ラジオによつて宗教復興の気運が高まつたと指摘したりしている。この認識は正しいが、事実の一面にすぎず、ラジオで啓蒙活動を行なうことが國の政治を左右するほどの権力になるという危惧は、河野の言説には見当らない。これは当然のことながら河野一人の問題ではなく、日本放送協会も含め、当時のラジオ界全体における認識不足であつた。今日もなお、昭和初期のラジオ放送が異様なまでの影響力を持つてしまつ

た事実について研究は少なく、ラジオ史研究のさらなる発展が望まれる。

IV まとめと仮説

本稿は、神道系ラジオ知識人として、戦前のラジオ放送に多く出演した河野省三を取りあげ、松下幸之助の思想との対照を試みた。両者には、宇宙の「根源」、人間は万物の王者、「知情意」、「繁榮、平和、幸福」など、類似するフレーズがいくつか確認され、人間観や宇宙観の基本はほぼ同じであると指摘できる。河野と幸之助の個人的な接点は、ラジオの出演者と聴取者という以外は考えられず、河野によるラジオ出演回数の多さを勘案するならば、河野の放送が幸之助の思想へ一定の影響を及ぼしたと想像される。

一方で、河野が何度も主張しているのに幸之助に全く見られない言説も確認できた。幸之助はラジオから学びつつも主体的に思想を取捨選択し、妥当性を欠く部分は捨象していたと思われる。また逆に言えば、少しでも暴論を吐く論者の意見は全般的に聞き入れないという態度をとつたのではなく、一部でも首肯できる思想があれば、その部分は積極的に採り入れていたと考えられる。

河野が時に極端な論説を開いた背景には、河野以外の神道系知識人が余り社会に出て活躍しなかった事実があった。河野は、神道系ラジオ知識人として孤軍奮闘した結果、時に荒唐無稽な主張をすることもあつたと考えられる。

以上の論証を踏まえた上で、本稿では幸之助の思想に関するいくつかの仮説を立てたい。第一に、河野は特別攻撃隊を称揚するなど、軍国主義的な立場をとつたが、戦後の幸之助は平和の「P」を頭文字に掲げたP.H.P運動を主導した。この点において両者の思想は対蹠的であるが、それにもかかわらず、幸之助はP.H.P運動初期の著作である『P.H.Pのことば』で、河野や吉田神道に近い人間観や宇宙観を主張している。この意味では、幸之助は河野のような「神道の『本道』」を継承しながら、平和的な神道を模索したと解釈できるのではないか。

第二に、河野は、「神」や「仏」は呼び名が違うだけであつて同様のものだと言いつつも、自身に仏教の素養がなかつたためか、神仏習合的な発想は説かなかつた。幸之助は、神道と仏教を分ける、いわゆる「反省神道」の立場ではなく、明らかに「習合神道」の立場であつた。幸之助は、河野が説いた神と仏の対等性を一步進め、戦後版の神仏習合を模索した可能性がある。

第三に、「根源」はP.H.P運動初期の『P.H.Pのことば』には何度も登場するが、昭和五〇（一九七五）年の『人間を考える』には一回しか登場しない。¹⁴⁹『人間を考える』の第二巻である『日本と日本人について』には、「根源」は一切登場しない。終戦直後の松下において「宇宙根源の力」と「人間は万物の王者」は密接な関係にあつたが、後には「万物の王者」が特に強調されるようになつた。

先にも記したように、戦後になると幸之助は伊勢神宮との関係を深めていったので、その結果として、吉田神道的な「根源」よりも、伊勢神道と吉田神道に共通する「人間は万物の王者」が前面に出てきた

可能性もある。もし、「吉田的宇宙觀」と「伊勢的宇宙觀」という二分法を想定するならば、幸之助の宇宙觀は終戦直後では前者に近く、やがて後者に接近したと考えられる。

以上のことから、幸之助の述べる「新しい人間觀」について、より詳しい理解が可能になるであろう。

【注】

- (1) 坂本慎一「高島米峰と松下幸之助をめぐるラジオ——昭和八年までを中心には『論叢 松下幸之助』第四号（P.H.P.総合研究所、二〇〇五年）、同『戦前における友松圓諦の真理運動』——高島米峰、松下幸之助との連関と共に』『論叢 松下幸之助』第五号（P.H.P.総合研究所、二〇〇六年）、同『松下幸之助と高神覺昇の思想』——西田幾多郎の哲学と共に』『論叢 松下幸之助』第八号（P.H.P.総合研究所、二〇〇七年）。また、これら仏教系の知識人の他に、個人的にも交流のあったラジオ知識人として、下村宏（号は「海南」）の影響も調査した。同『玉音放送に至るまでの下村宏の事績と思想——松下幸之助との交流と共に』『論叢 松下幸之助』第七号（P.H.P.総合研究所、二〇〇七年）、同『松下幸之助と下村宏の道州制論——台湾總督府の州庁制と大戦末期における地方監督制の重要性』『論叢 松下幸之助』第九号（P.H.P.総合研究所、二〇〇八年）、同『太平洋戦争直前における松下電器の『鍊成』運動会とその周辺——下村宏との関係と『鍊成』概念の横滑り』『論叢 松下幸之助』第一一号（P.H.P.総合研究所、二〇〇九年）。
- (2) 松下幸之助『私の行き方考え方』（P.H.P.研究所、一九八六年）二五一页。
- (3) 松下幸之助『刊行のことば』神道大系『首編一 神道集成』（神道大系編纂会、一九八一年）。

(4)

伊勢神宮への茶室の寄付は、P.H.P.総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室編『松下幸之助発言集』（P.H.P.研究所、一九九一～三年）第四二巻、三六一～三頁。伊勢神宮への思いを語つたものとしては、松下幸之助「心のいしづえ」樋口清之他『伊勢神宮』（旭屋出版、一九七三年）がある。

(5)

河野に関する先行研究は、安津素彦「河野省三」「神道の研究」第四一号（神道宗教学会、一九六五年）、鈴木淳「後記」國學院大學日本文化研究所編『河野省三記念文庫目録』（錦正社、一九九三年）、中澤伸弘「第二巻解説」中澤他編『国学和学研究資料集成 第二巻 国学の研究』（クレス出版、二〇〇八年）、鎌田東二「河野省三①～③」『中外日報』（二〇〇八年五月二〇日付）二面、二二日付一二面、二七日付一面）、西岡和彦「河野省三」「國學院大學日本文化研究所報」第四二巻五号（通巻第二四八号、二〇〇六年）七～九頁がある。

(6)

たとえば、騎西第二国民学校全職員編著・発行『大東亜戦争勃発記念騎西郷土読本』卷三（年代不明）一四～五頁。

(7)

安蘇谷正彦『神道研究』の百年——神道研究の二つのタイプ——『宗教研究』（日本宗教学会、二〇〇五年）第七八巻第四輯（三四三号）によれば、神道研究には、神道の信仰がある人による「神学」と、信仰がない人による客観的分析の「二つのタイプ」があるという。ここでは後者のスタンスで論を進めることにしたい。

(8)

河野省三『皇道の研究』（博報堂出版、一九四二年）一二一頁。

(9)

河野省三『日本人の生活』（國學院大學宗教研究室、一九五二年）四頁。

(10)

前掲『日本人の生活』一二三頁。

(11)

同前、五六頁。

(12)

同前、二二二頁。

(13)

同前、七四頁。

(14) 同前、七二頁。

(15) 同前、八六頁。

(16) 同前、一一七頁。

(17) 同前、一二一頁、河野省三「統・日本人の生活」(國學院大學宗教研究室、一九五三年)四七頁。

(18) 前掲「統・日本人の生活」一七〇八頁。

(19) 河野省三「私の教育事業」『國學院雜誌』第六四卷第五・六号(國學院大學、一九六三年)一四頁。

(20) 前掲「大東亜戦争勃発記念騎西郷土読本」卷三、八頁。

(21) 同前、九頁。

(22) 同前、一頁。

(23) 『朝日新聞』(東京版)昭和一七(一九四二)年三月八日付四面。

(24) 渡辺国雄「家庭人としての父、学者としての父」、前掲『國學院雜誌』第六四卷第五・六号、二四五頁。

(25) 河野省三「神道と国民生活」(昭和九年版)(中文館書店、一九三四年)序一頁。

(26) 河野省三「神道」(ラジオ新書五〇)(日本放送出版協会、一九四一年)一五八頁。

(27) 日本放送協会編・発行「朝の修養」第二編第一号(一九三五年)。このパンフレットは、当時の放送のテキストに当たると思われる。

(28) 日本無線史編纂委員会編「日本無線史」第八卷(電波監理委員会、一九五一年)三三〇〇一頁。

(29) 矢部謙次郎「我観米峰」「高嶋米峰自叙伝」(学風書院、一九五〇年)追憶編一五七頁。

(30) 每日新聞図書編集部編「ラジオ」(毎日新聞社、一九五〇年)一三〇頁。

(31) 河野省三「神道学序説」(金星堂、一九三四年)序五頁。

(32) 河野省三「国民道德と神道」(大倉精神文化研究所、一九三三年)

六〇頁。

(33) 前掲「皇道の研究」二六三頁。

(34) 河野省三「國体觀念の史的研究」(日本電報通信社出版部、一九四二年)一〇二頁。

(35) 河野省三「神祇史概要」改訂五版(帝国神祇学会出版部、一九三一年)一一七頁。

(36) 前掲「國體觀念の史的研究」一〇四頁。

(37) 河野省三「本居宣長」第四版(北海出版社、一九四三年)一五四頁。

(38) 河野省三「近世に於ける神道的教化」(國民精神文化研究所、一九四〇年)三五頁。

(39) 河野省三「神道研究集」(埼玉県神社庁、一九五九年)四七頁。

(40) 河野省三「近世神道教化の研究」(國學院大學宗教研究室、一九五五年)一六頁。

(41) 同前、七五頁。

(42) 吉田神道の民衆教化を河野が紹介したものとしては、河野省三「中臣祓と民族精神」(内閣印刷局、一九四〇年)、同「三社託宣の信仰」(日本文化協会出版部、一九三五年)、同「神道大意」(日本文化協会出版部、一九三六年)、同「神道大意」(内閣印刷局、一九四〇年)など。一方で、河野は、吉田神道に色濃い陰陽五行説については、ほとんど論述していない。

(43) 前掲「河野省三記念文庫目録」が刊行されている。

(44) 前掲「皇道の研究」一二五頁。

(45) 前掲「神道と国民生活」(昭和九年版)一九一〇三頁。

(46) 前掲「神道と国民生活」(昭和九年版)一九一〇三頁。

(47) 前掲「神道と国民生活」(昭和九年版)一九一〇三頁。

(48) 前掲「神道と国民生活」(昭和九年版)一九一〇三頁。

(49) 前掲「神道と国民生活」(昭和九年版)一九一〇三頁。

- (50) 河野道雄「父の思ひ出」、前掲『國學院雑誌』第六四卷第五・六号、二四〇頁。
- (51) 河野省三『嗜みの生活』(玉光会、一九五八年)三頁。
- (52) 高沢信一郎「河野先生と神職」、前掲『國學院雑誌』第六四卷第五・六号、二四〇頁。
- (53) 河野省三『日本精神』(歎傍書房、一九四一年)一九五頁。耳が悪かったことは、前掲『日本人の生活』二五頁、前掲『統一日本人の生活』五一頁でも述べている。
- (54) 昭和五六(一九八一)年五月五日、創業の森根源社入魂式における講話、『速記録』第一八七九卷(PHP総合研究所経営理念研究本部所蔵)四五五頁。
- (55) 松下幸之助『PHPのことば』(PHP研究所、一九七五年)一二四五頁。
- (56) 同前、一二三七〇八頁。
- (57) 出村勝明『吉田神道の基礎的研究』(神道史學會、一九九七年)六六頁。
- (58) BooksEsoterica第二号『神道の本』(学習研究社、一九九二年)一五八頁。
- (59) 河野省三『神道通論』(東京図書出版、一九四四年)四九頁。
- (60) 神道大系『論説編八ト部神道(上)』(神道大系編纂会、一九八五年)八八九頁。
- (61) 前掲『国民道德と神道』一二〇頁。
- (62) 同前、一一一頁。
- (63) 河野省三『日本精神の研究』(大岡山書店、一九三四四年)三一〇一頁。
- (64) 前掲『神道文化史』三三三頁。
- (65) 河野省三『神道読本』(昭和書房、一九三五年)三頁。
- (66) 松下幸之助『人間を考える第一巻——日本の伝統精神 日本と日本について』(PHP研究所、一九八一年)八〇頁。
- (67) 前掲『松下幸之助発言集』第二三一巻、七六頁。
- (68) 同前同巻、八四頁。
- (69) 幸之助は天照大神が八百万の神々を招集し、「衆議」を行なつたと解釈している(前掲『人間を考える第二巻』八〇頁)。記紀にそのように解釈できる場面はあるが、必ずしも強調されているわけではない。神代における衆議の重要性を強調するのは『先代旧事本紀大成経』である(統神道大系『論説編先代旧事本紀大成経(一)』〔神道大系編纂会、一九九九年〕一九一頁)。「先代旧事本紀大成経」の作者は不明であるが、その狙いは吉田神道の「学理的、宗教的組織を確立」することだったと河野は述べており(河野省三『旧事大成経に関する研究』〔國學院大學宗教研究室、一九五二年〕三五頁)、河野が「先代旧事本紀大成経」に則ってラジオで神代の説明をした可能性もある。幸之助の解釈する神代が記紀よりも「先代旧事本紀大成経」に近いと解釈するならば、この点においても河野から影響を受けた可能性が指摘できるだけではなく、「根源」の発想以外にも、幸之助の思想と吉田神道の親和性が確認できる。
- (70) 前掲『PHPのことば』三七三頁。
- (71) 同前、四〇四頁。
- (72) 松下幸之助『人間を考える第一巻』(PHP研究所、一九七五年)九九一〇頁。
- (73) 前掲『PHPのことば』二四五頁。
- (74) 昭和五五(一九八〇)年四月八日、松下政経塾第一期生との懇談、『速記録』第一八七一巻(PHP総合研究所経営理念研究本部所蔵)三八九頁。
- (75) 前掲『PHPのことば』三一九二〇頁。
- (76) 神道大系『論説編五伊勢神道(上)』(神道大系編纂会、一九九

(77) 三年) 二三、五二頁。

前掲『論説編八・ト部神道（上）』九頁。

(78) 河野省三『宮川隨筆』（神宮司庁教導部、一九六二年）一五五頁。

(79) 河野省三『神道と国民生活』（昭和一八年版）（明世堂書店、一九四三年）一二二頁。

(80) 神道大系『論説編二・真言神道（下）』（神道大系編纂会、一九九二年）四二四頁。

(81) 神道大系『論説編三・天台神道（上）』（神道大系編纂会、一九九〇年）四九、四二八頁。

(82) 神道大系『論説編二十四・復古神道（二）』（神道大系編纂会、一九八八年）一四頁。

(83) 『日本書紀』（下）（岩波書店、一九六五年）三三九頁。

(84) 河野省三『神ながらの國』（明世堂書店、一九四三年）一二三六頁。

(85) 同前、二三五頁。

(86) 河野省三『國体と日本精神』（青年教育普及会、一九四一年）一二六頁。

(87) 恐らくこれと連関することとして、幸之助は進化論に否定的であった。幸之助は「宇宙根源の力が人間の故郷であり、人間をつくつたもの」と主張し、「猿が人間の祖先であるというような貧困な考え方をもちたくない」とか「人間は初めから人間であり馬は初めから馬であります」と説く（前掲『P.H.Pのことば』二九八九頁）。「人間は万物の王者」という主張は、「宇宙根源の力」と連関しながら進化論の否定につながっている。「宇宙根源の力」が国常立尊（天御中主神）と同様の存在だと仮定すれば、幸之助による進化論否定の背後には、記紀などの天地創造神話が想定されていたことになる。

(88) 前掲『P.H.Pのことば』五六、七頁。

(89) 昭和五〇（一九七五）年四月一四日『週刊朝日』取材、《速記》

錄》第一四三四卷（P.H.P.総合研究所経営理念研究本部所蔵）二七頁。

(90) 河野省三『國民道德本義』第三版（天地書房、一九三八年）二四四頁。

(91) 前掲『皇道の研究』三三六頁。

(92) 河野省三『國民道德要論』第三版（森江書店、一九二九年）一三三頁。

(93) 河野省三『國学と近世文化』（文部省、一九三五年）五三、四頁。

(94) 前掲『P.H.Pのことば』二四四頁。

(95) 同前、二五四頁。

(96) 河野省三『歴代の詔勅』（内閣印刷局、一九四〇年）一、四三頁、

(97) 前掲『神道』五五頁、前掲『國民道德本義』七七、一〇八頁、前掲『皇道の研究』二二六頁など。

(98) 前掲『神道序説』一五六頁。

(99) 前掲『神道読本』一五一頁。

(100) 同前、一五六頁。

(101) 同前、一六四頁。

(102) 数は少ないが、河野には「皇室の繁栄と國家の発展と國民の幸福」

（前掲『國民道德要論』一二一頁）、「皇室の繁栄、國家の発展、國民の幸福」（河野省三『日本民族の信念』（青年教育普及会、一九三四年）三一頁）、「寶祚の無窮・玉体の安穩・國家の平和・國民の幸福」（前掲『國体觀念の史的研究』三五頁）という表現もある。

昭和二三（一九四八）年三月六日、大阪控訴院会議室におけるP.H.P.講話、《旧速記録》第三八卷（P.H.P.総合研究所経営理念研究本部所蔵）四六、七頁。

(103) 松下幸之助『社員稼業』（P.H.P.研究所、一九九一年）四話「何に精魂を打ち込むのか」一三五頁。

(104) 松下幸之助『月日とともに』（松下電器産業株式会社、一九六三年）八四頁。

松下幸之助『商売心得帖』（P.H.P研究所、二〇〇一年）四〇頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三四巻、九五頁。

前掲『皇道の研究』一五六頁。

前掲『日本精神』二九頁。

前掲『神ながらの國』二一六頁。

前掲『神道』三一頁、河野省三『我が國民道徳の精髄』（社会教育協会、一九三七年）一二頁、前掲『嗜みの生活』一八頁、前掲『神ながらの國』二五〇、二九八、三〇四頁、前掲『日本精神』二〇、二八、一三八、一六〇、二〇三頁など。

ただし、違いを言えば、河野は「魂を打ち込む」ことを「日本精神」の特徴とし、「日本」を強調しているが、幸之助は「魂」と仕事の関係において、必ずしも「日本」を強調していない。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、三七頁。

同前同巻、八九頁。

前掲『神道読本』一二二頁。

前掲『国民道徳本義』二四四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、六八九頁。

昭和三七（一九六二）年一二月二三日、京都大学平沢興総長との対談、『速記録』第三八八巻（P.H.P総合研究所経営理念研究所所蔵）四三頁。

前掲『皇道の研究』二二二三頁。

前掲『日本民族の信念』四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三五巻、一八二頁。

松下幸之助・北村武『新時代の政治・経済の核を探る』（日刊経済新聞社編『日本を考える』（日刊経済新聞社、一九七七年）四〇

頁。

前掲『国民道徳本義』六頁。

前掲『皇道の研究』八二頁。

前掲『近世神道教化の研究』巻頭一頁。

河野省三「真実な自主性の確立」『弘道』第六八三号（日本弘道会、一九五四年）二頁。

河野が、「神々しさ」「懐かしさ」「すがすがしさ」について論じているところは、前掲『神道読本』一二頁、前掲『宮川隨筆』附録二八頁、前掲『国民道徳本義』二八九、三一、二八七、三六二四頁、前掲『神道文化史』一六頁、前掲『皇道の研究』五一二、一七九八〇頁、前掲『神ながらの國』一三九、四一頁、前掲『日本精神』一四九、三一一頁、前掲『神道と国民生活』（昭和九年版）五四頁など。

前掲『皇道の研究』三三四五頁。前掲『神ながらの國』二一八「二二頁では、宗教的情操教育として、同様の七つの方法を挙げている。

前掲『日本民族の信念』七二頁。ウサギとカメの童話はイソップ物語が原典であり、類似の話は世界中に存在するので、ことさら「日本精神」と関連づけることは妥当ではないであろう。

前掲『日本精神』三〇三頁。

前掲『神道と国民生活』（昭和一八年版）八八頁。

前掲『神ながらの國』一七〇頁。

前掲『国体と日本精神』序四五頁。河野省三『日本精神研究の本流を溯る』（日本文化協会出版部、一九三六年）二頁でも同じことを説いている。

前掲『国体と日本精神』五頁。

前掲『日本民族の信念』二〇一頁。ほぼ同じ主張が前掲『国民道徳本義』二六二三頁にある。

松下幸之助『月日とともに』（松下電器産業株式会社、一九六三年）八四頁。

松下幸之助『商売心得帖』（P.H.P研究所、二〇〇一年）四〇頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三四巻、九五頁。

前掲『皇道の研究』一五六頁。

前掲『日本精神』二九頁。

前掲『神ながらの國』二一六頁。

前掲『神道』三一頁、河野省三『我が國民道徳の精髄』（社会教育協会、一九三七年）一二頁、前掲『嗜みの生活』一八頁、前掲『神ながらの國』二五〇、二九八、三〇四頁、前掲『日本精神』二〇、二八、一三八、一六〇、二〇三頁など。

ただし、違いを言えば、河野は「魂を打ち込む」ことを「日本精神」の特徴とし、「日本」を強調しているが、幸之助は「魂」と仕事の関係において、必ずしも「日本」を強調していない。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、三七頁。

同前同巻、八九頁。

前掲『神道読本』一二二頁。

前掲『国民道徳本義』二四四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、六八九頁。

昭和三七（一九六二）年一二月二三日、京都大学平沢興総長との対談、『速記録』第三八八巻（P.H.P総合研究所経営理念研究所所蔵）四三頁。

前掲『皇道の研究』二二二三頁。

前掲『日本民族の信念』四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三五巻、一八二頁。

松下幸之助・北村武『新時代の政治・経済の核を探る』（日刊経済新聞社編『日本を考える』（日刊経済新聞社、一九七七年）四〇

松下幸之助『月日とともに』（松下電器産業株式会社、一九六三年）八四頁。

松下幸之助『商売心得帖』（P.H.P研究所、二〇〇一年）四〇頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三四巻、九五頁。

前掲『皇道の研究』一五六頁。

前掲『日本精神』二九頁。

前掲『神ながらの國』二一六頁。

前掲『神道』三一頁、河野省三『我が國民道徳の精髄』（社会教育協会、一九三七年）一二頁、前掲『嗜みの生活』一八頁、前掲『神ながらの國』二五〇、二九八、三〇四頁、前掲『日本精神』二〇、二八、一三八、一六〇、二〇三頁など。

ただし、違いを言えば、河野は「魂を打ち込む」ことを「日本精神」の特徴とし、「日本」を強調しているが、幸之助は「魂」と仕事の関係において、必ずしも「日本」を強調していない。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、三七頁。

同前同巻、八九頁。

前掲『神道読本』一二二頁。

前掲『国民道徳本義』二四四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、六八九頁。

昭和三七（一九六二）年一二月二三日、京都大学平沢興総長との対談、『速記録』第三八八巻（P.H.P総合研究所経営理念研究所所蔵）四三頁。

前掲『皇道の研究』二二二三頁。

前掲『日本民族の信念』四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三五巻、一八二頁。

松下幸之助・北村武『新時代の政治・経済の核を探る』（日刊経済新聞社編『日本を考える』（日刊経済新聞社、一九七七年）四〇

松下幸之助『月日とともに』（松下電器産業株式会社、一九六三年）八四頁。

松下幸之助『商売心得帖』（P.H.P研究所、二〇〇一年）四〇頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三四巻、九五頁。

前掲『皇道の研究』一五六頁。

前掲『日本精神』二九頁。

前掲『神ながらの國』二一六頁。

前掲『神道』三一頁、河野省三『我が國民道徳の精髄』（社会教育協会、一九三七年）一二頁、前掲『嗜みの生活』一八頁、前掲『神ながらの國』二五〇、二九八、三〇四頁、前掲『日本精神』二〇、二八、一三八、一六〇、二〇三頁など。

ただし、違いを言えば、河野は「魂を打ち込む」ことを「日本精神」の特徴とし、「日本」を強調しているが、幸之助は「魂」と仕事の関係において、必ずしも「日本」を強調していない。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、三七頁。

同前同巻、八九頁。

前掲『神道読本』一二二頁。

前掲『国民道徳本義』二四四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第二九巻、六八九頁。

昭和三七（一九六二）年一二月二三日、京都大学平沢興総長との対談、『速記録』第三八八巻（P.H.P総合研究所経営理念研究所所蔵）四三頁。

前掲『皇道の研究』二二二三頁。

前掲『日本民族の信念』四頁。

前掲『松下幸之助発言集』第三五巻、一八二頁。

松下幸之助・北村武『新時代の政治・経済の核を探る』（日刊経済新聞社編『日本を考える』（日刊経済新聞社、一九七七年）四〇

前掲『國体と日本精神』二九六頁。

前掲『皇道の研究』二八六頁。

(138) (137) (136)
前掲『神道読本』序一頁、前掲『國体と日本精神』二〇、二八六
頁、前掲『皇道の研究』一二七頁、前掲『神ながらの國』一六九
頁など。

前掲「真実な自主性の確立」一頁。

身辺雑記としては前掲『嗜みの生活』、自叙伝としては前掲『一
日本人の生活』、前掲『続・日本人の生活』、河野省三『教育の
友（若い頃の思ひ出）』（玉光会、一九五五年）などがある。

河野省三「三男健雄を偲ぶ」前掲『教育の友（若い頃の思ひ出）』。
松下幸之助『仕事の夢暮しの夢』（P.H.P研究所、一九八六年）
八九頁。

同前、九〇頁。

前掲『神道と国民生活』（昭和一八年版）七三頁。

(145) (144) (143)
河野省三『国学の研究』（大岡山書店、一九三一年）はしがき八
頁。

前掲、鎌田東二「河野省三①」。

前掲『神道と国民生活』（昭和一八年版）七三～四頁。

前掲『皇道の研究』三三三二頁。

前掲『人間を考える第一巻』五七頁。

(さかもと・しんいち P.H.P総合研究所経営理念研究本部松下理
念研究部主任研究員)